

大和田建樹作

心法

東京

中央堂祭員

KODAK Gray Scale

G

Y

M

KODAK
LICENSED PRODUCT

5

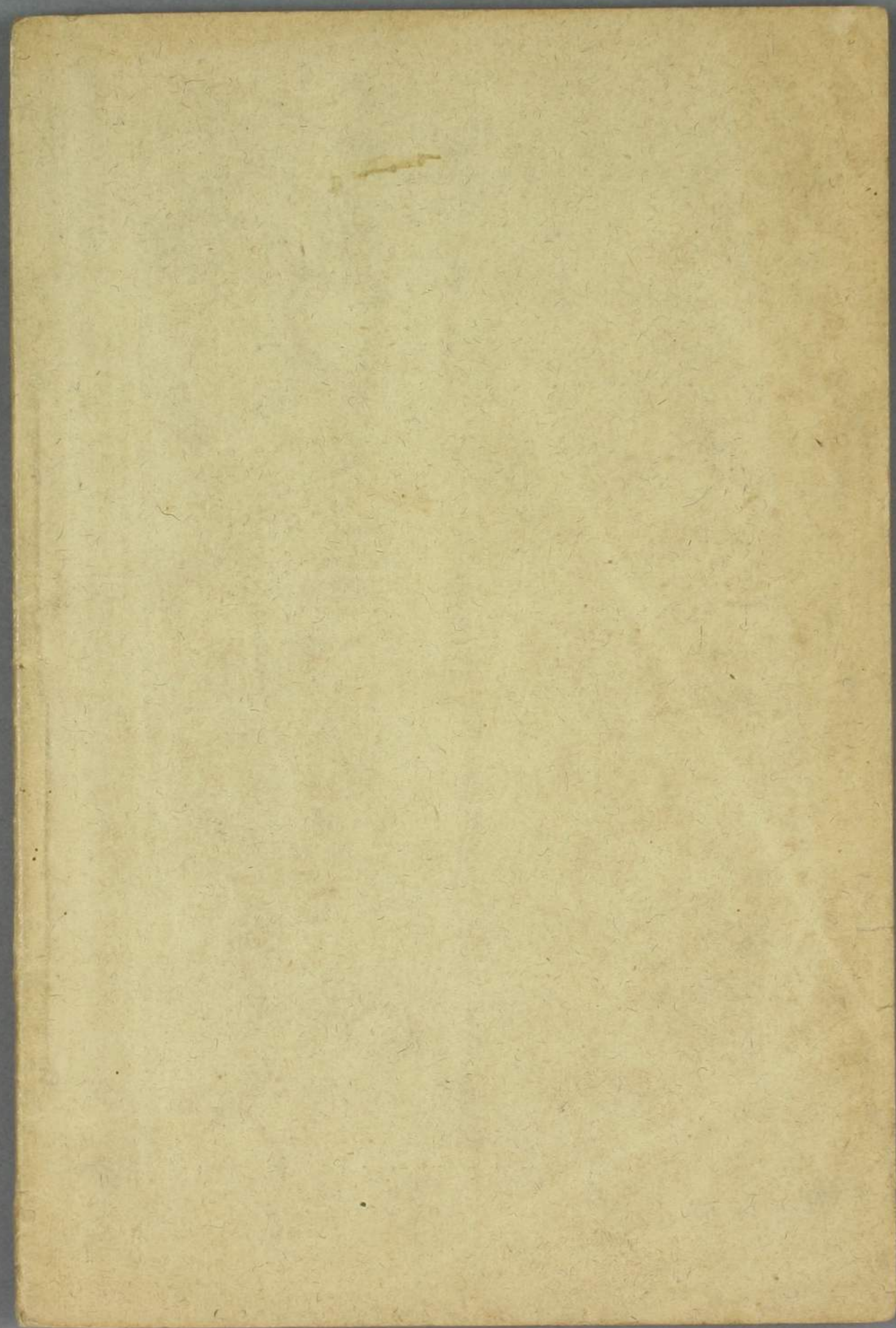
10

15

20

25





Present my love as a
token of meeting again.

Your servant

S. Tokata

大和田建樹作

心
作
心
全

東京 中央堂 祭員

大分県立総合資料館
大分県立総合資料館
大分県立総合資料館

自序

今のむかし、わが十三の年かりき、始えて歌つくり試みて、宍戸千建といふ老人小見せたるを、老人より父は告げられて、武士のすべき武藝もせず、公卿方免きたる遊びをするとして、厳しく戒められたるふとあり、またその頃、詩語碎金がほしきといふを許されざりしことも何りけり、かくゆるさきぬ道あれば、書籍も師匠も得ること何たらず、ある時の百人一首の頭書をそらんじ、ある時の神社ふまうで、繪馬ふしるせる歌を

自序

二
読みおぼえなどしつゝ、ひそかに學びし年月を
おもへば、茫然として夢れやうあり、いまこの小
冊子を公よせんとして草稿ふか、れば、歌書の自
由ふかたはらゝ積まきて、むつまじく詞賦か
し、父の笑顔とく隔てぬ燈火の影ふかたれり、う
れし死ふつけても恥づかしき、童ごゝろふ豫
想せし十が一つれ上手よも至りかぬるおとよ、
十五の年の春ふやありけん、するまゝ、硯
の墨のこくなまど成らぬ言葉の道ぞかなしき
と、詠ぜしをりもありしを、さりとして思ひほてお

んのわが志おらねば、ひたひた世の批判をえてぞ、
改むべきの改め、研くべきのみが、んとて、をこ
がましくも自らす、ふいでたるのみ、われ既ふ
一人の師おし、たゞ万人の師をえんことをこそ、

明治廿一年十二月

大和田 建樹

しるす

目録

少女の望	一	十八	丁
春の夜	二	十八	丁
海のおかた	四	十八	丁
籠の鳥	六	十六	丁
別れしあせ	八	十四	丁
わかみどり	十	十四	丁
人まつほど	十	十一	丁
海邊の歌	十	十二	丁
おでしこ	十	十五	丁
歸郷の前	十	十六	丁
ほたる草	二	十一	丁
瀧	二	十三	丁
山里ふて	二	十五	丁
夕の空	二	十七	丁
おどりの花	二	十九	丁

秋のかたみ	三十三丁
夕雲	三十四丁
何らき	三十六丁
かたみの琴	三十九丁
千鳥	四十一丁
かへらぬ影	四十三丁
少女の死	四十五丁
冬の月	四十九丁
春の歌(四首)	五十二丁
夏の歌(二首)	五十四丁
秋の歌(五首)	五十四丁
冬れ歌(二首)	五十六丁
雑の歌(四首)	五十七丁
小兒の病み居ける頃(二首)	五十八丁
旅日記の中より(五首)	五十八丁

少女の望

うつくしきその望のぞみ

花の蒼つばきをあらはして

少女をこめの胸むねに笑みえみをのめぬ

雨あめも嵐あらしえけさはたゞ

色香いろかをほえる愛あいの友とも」

うつくしきその望のぞみ

眉まゆあたらしき三日かみ月つきと

かすむ額ひたひふかゞやきぬ

夕暮ゆふぐれごとふまさりゆく

少女の望

影よ未采を照らしつゝ

うつくしきその望
雲雀の羽をうちひろげ

下りも上りもまだ知らぬ
むかふよ空の海原ふ
かふたふ星のほの見えて

春の夜

春風さむくぞよふけて
火影またゝく窓のもと

われかひとか
机よよりて離れぬ姿

あゝいつのまふ戀人は
わが歌さゝに采りしぞ

けしき身よしむ
ふるね震かあら雪か
靡夜ふ

ほろりちらり
軒端ふ近くひらえく影
どもふ舞はん

今宵あくがれ采りしか

春の夜

箱はあきて更けわたる

月ふきみゆく鐘の聲

人いづこ

歌へむかはを木の間の調

あゝ戀人

あざり踏まんと訪ひ来しか

海の何あそ

いさり火遠く見えそ免て

沖よりとす暮の色

服かば夢路とすぎさりし

たびの月日もいま幾日

あゝ戀し海のあまた

親子うちつれ岩かげを

れくきて歸る海士小舟

あすの日和の外また

えのおもひを紀生涯や

何ゝ戀し雲のあまた

こゝろ千里れ旅びとを

いつまで吹くか春の風

寐られぬ夜の友とて

海のをなした

籠の鳥

有明月のかげさ江て
 草のまくらを起きはるまき
 空よりうたはん時はいま
 いそむ翼をいかふせん
 雲より入るべきみちたえぬ

まくらをたたく波の聲
 あゝ戀し家あるひと

籠の鳥

朝日はいまもふるさとの
 すみきの露よ句ふらん
 友れ羽がひを照らすらん
 かがめはてかき天の原
 神のあたへし庭あるを
 聲もとゞえぬ我戀ひて
 戀しやかれし水の音
 あわれれ夢みぬそきあらば
 歌ひし外におおえおき

囚こりこのわが身みいつまでぞ

あれふぞみゆる窓まどごしふ

野ついで寺てらの塔たかのくもかすみ

いまはかよむぬよその空そら

うらやましき春はるの風かぜ

あはれ慈悲じひある少せう女にょ子こよ

親子おやこの情じやうの己おのれのみか

別れ去あと

春風はるかぜの吹かきすぎぬ

ながれよのこる波なみの花はな

うぐひすの飛とび去さりぬ

こゝろおつゞく歌うたの聲こゑ

わかまし君きみよわが胸むねを

はかれぬ影かげのなをあとに

水鏡みづかがみしても

あたりしあの小川せがは

語る望のぞもかくうちつきて

やすみしあの木蔭かげ

君きみがひたひふかゞやきし

夕日ゆふひの雲くものなほあきし

別れ去あと

わかみどま

誰が琴のしらべかまじる

わか緑おほふ木蔭を

はしりくる水もあつかし

花つみよあひし少女の

面影いままみゆるを

まぼろしよ今も浮ぶを

春かへり梢あがりて

人とほく里へだゝりぬ

何はれその吹きくる風よ

言とらん夢とまぎふし

春のゆくへを

人まつほど

村雨のはれゆくそらよ

なとゝぎを一聲あきつ

橋のはちるかたふ

よつゆつゝ螢ともしぬ

心ゆく夜ふもあるかゝる

契りおきし人待つほどの

つれづれをあぐさめがてら

人まじほど

庵いほの外との畔あぜみちづたひ
苔こけ清しみ水みづむすびて来こんと

わがゆけば松まつの葉はごいふ
月つきえのぼりぬ

海邊れ歌

をどき波なみ自然しぜんの鼓つづみうちつれて

疲つかれぬ拍ひょうし子こふみつれて

いざとびこ江えよわが上うへを
濤うくも沈しづむもたゝ汝あれふ

うてよ波なみうちてくだけて捲まきかへる
すはく来くるぞ又一また一つ身みをよせて

かへれ波なみ人ひと影かげえおきそらのうみ
洗あらむはて、口くち又また穢いそふ

おける雷いかづちちるあられが身みか神かみの手てか

海邊の歌

き の ふ の 恐	汝 が 懐 ふ 身	い つ ま で え	あ な や 呑 ま れ て 一 口 お	よ せ く る 雪 の 遠 山 の	よ せ よ 波
底 も 一 つ の 汝 が こ ゝ ろ	け ふ の 愛 し く 待 て よ 波	あ ま も 樂 し く 待 て よ 波	い る か 白 蛇 の は ら の う ち	か し ら お 裂 け て 吹 ゆ る 聲	

去 り が て お 花 の あ た り を	起 き か へ り あ ぐ る 面 ま の 似 た る	ち か ら お き 少 女 の ゆ び お	白 露 を な み だ と う け て た れ ふ か 似 た る	少 女 が 朝 ふ む 庭 お	お で ま こ
そ の 句 た れ ま か 似 た る	そ の 涙 う ち は ら は せ て	立 て る 色 た れ ふ か 似 た る	笑 の 眉 ひ ら く お で し こ		

とぶ蝶よいづれお花の

品定する

歸郷の前

わが屋をおろふ椎一木

ながまゝ垂れて晝さむく

手飼れ犬の水飲み

下りゆく姿はや失せぬ

あゝこひし

そのあたり

董つみていやすみたる

うしろの岡の発岩

かはらぬ愛よわが友よ

これぞ心お消江ぬ影

いざいなん

ふるさとふ

まばし小川お浴ひゆけば

松原盡きてまへに海

魚をる舟もあがむべし

干潟の貝もひろふべし

あ、たのし
そのけしき」

父をたすけて夕ごとふ

水と、ぎたる朝顔も

このごろおらんその盛

あすの笑顔がほをけふの夢

あ、こひし

あ、たのし」

南風ふさいる窓のもと

讀みてくらさん母上の

軒端の鈴をき、ながら

このませたまふ小説を

あ、たのし

来んつきひ」

夕やけ雲のそらたかく

かへる鳥の三ついつ、

あきと見上げて指さし、

いもどい今年はや七つ

いざきかん

そのこゑを

あとふりむけべ送り采し

湊みなとのきしのふる柳やなぎの御顔みかほのかくれたる

うらみ忘わすきてあすの見みん

あゝうれし

あゝたのし

耳みみふおれたる里さと謡うたの

ひゞくあなたぞ叔母おばの門かど

そよぐ青田あをた

の波間なまより
はや何らはれよ招まねく手てれ

あゝこひし

いざいあん

ほたる草

晴はれにたるみそらの色いろふ

装よせしたてるをとめよ

谷川たにがはのくさばがくきふ

見みえかくきなびく姿すがたよ

ほたる草

香かふにほひ時ときめくはふを
とそふ見みて垂たきふす眼まみよ

ゆく水みづふ裾すそをひたして
涼すずしげふうち笑あはむさまと

里さとの子こがふたるとよびて
うつくしむ少女をとめぞ汝あれの

歌うた人の月つきをちづけて
もてはやまをせ免あれぞ汝あれの

かくりけん愛あいのしるしか
朝霧あさぎりの手てづからかけし
露つゆの白しろ玉たま

瀧

解ときみだしさらせる布ぬのよ
かせよ掛かけ繰くり引ひく糸いとよ

やまひめのこゝや機はた殿どの
しろたへの簾すだれぞおろす

なかばより谷たにの絶たきて
よかみどり影かげもうつらす

汝あれひとり
世よふうつくしき
えのいありけり

瀧

一時ひとときふ落おつるいかづち

山やまの裂さけ岩いはの千軍ちぐんのひづめのひゞき

吹ふきお湯ゆを松まつの嵐あらしもあが上うへを今いまふえ打うつか

汝あなが路みちはふるれを消きえて

汝あなひとり世よふこ、ちよき
ものい何りけり

白雲しらぐものそらよりおちて
うたふ聲こゑつゞみうつ聲こゑ

この山やまをつくりし神かみれ

流は行やりゆく手てはもさはらで
神代かみよより變からぬ調しらべ

あえつちの板いたおど合あはす
汝あなひとり

世よふ心こゝろたかき
ものいありけり

山里やまにて
みどりしたゝる軒のきの山やま

山里にて

朝日あさひをそらふへん變化くわつねあきまどの雲くも

造化さうくわの腕うでわがうたおゝろかまきぬ谷たにの水みづ

とらへてこゝふはやい幾日か

目めざむる乳ち兒ごの枕まくらふ

やねよともよぶ山やま鳩はとえはまかざぐるま

幼心なつかしよもえそむるか馴なきてこと言葉ことばかゝまらん

造化さうくわの愛あいはやい幾重いくへ

薄うすれ波なみの穂ほがくまふ

たゞうちまねく夕ゆふ風かぜのを女郎むすめ花はな

垣根かきねづたひそと袖そでさまの野邊のへの秋あき

あとみかへれつま妻つまもこ子こも

夕ゆふの空そらの色いろ

夕ゆふの空そら

羽をひろげて 入日の何とよくれあゐの
誰がおもかげを 誰が
あゝ戀し人

おもしろれ 空のさま

色にやうく 消えゆきて

ちぎれくふ 散る雲れ

とばりをのぞく 月の顔
何、あゝ戀し人

あつかしの 雁の影
友うちつれて 何の空を

あゝろのまゝに 渡るぞや
自在のつばき 樂しき身

何、あゝ戀し人

なごり花

黄むみゆく 草をちからよ
なほたのむ 朝顔何はれ

色うすく身も 瘦せがきて
さきのこる一花 何はれ

あごり花

廿九

のぼる日ひの花はなふむかへど
 老おいはてし秋あきのかきねを顔かほもそむけず
 咲さきそめし汝あなが世よの始はじめ
 同胞どうぱうも友ともも志こころほみて
 有明ありあけのつきつきのしづくを
 たすけおき一ひと花はなあはき
 かゝらんと誰たれおもひきや
 杖つゑとぞたのむ
 玉たま望ぞとよそむひ

吹かきある、夜よ半はんの嵐あらしふ
 川かくろいぬ笑わら顔かほを、げて
 やぶらきぬ花はな笠がさみせて朝あさもありしを
 たよりつる薄うすいたふれ
 時とき々々ふ落おつる木こは葉はも
 ほこりつる朝あさもありしを
 志こころたしむし小こ蝶てふは失うせぬ
 なごり花はな
 身みふかゝる玉たま望ぞとよそむひ
 世よは立ちし朝あさえありしを
 その夢ゆめいとしやぶれても
 薄うすいたふれ
 小こ蝶てふは失うせぬ

身をうちてよそふぞ過ぐる

敵と見し日のむかりさへ

親と見しきのふの露の命とあるふ

身をころを霜とかはれり

あはれその花はみかゝる

さきだつても何はれその榮花はあごり

いざねむれ神のたまへる

土のまくらふ

秋はあゝと

童男子ら掃ひを捨てそ

あが門よつもる紅葉の

秋風のおきつるなごり

ぬれかへる霜の上を照らす日かげよ

山の井ふうかぶ木の葉の

少女子ら流しを遣りそ

立田姫のこせるかたみ

秋のかたみ

三十三

三十二

消えぬ間の霞をのせて

いざや子らおまつどひて

しばらくの秋をながめよ

くちなしの山端よ

うちかけて山端よ

秋の暇どりを

夕雲

浮世の戀れおもかげを

龍とおきふし神のゆく

何らしの何と青空ふ

何らしの何と青空ふ

何らしの何と青空ふ

何らしの何と青空ふ

何らしの何と青空ふ

何らしの何と青空ふ

何らしの何と青空ふ

何らしの何と青空ふ

夕雲

わが故郷ふるさとの霧きりのかく
鹿しかの音ねとほく響ひびくうた

何なにられ
芝生しばに落たちて走はしり舞まふ

ふきく白しろくつもるまで
いさほひたけき玉たま霰あられ

あはは色いろはきえ失うせぬ
すぎ一ひと名譽めいよの花はなふ似にて

たゞよむうかぶ池水いけみづの

落葉たちはをどる玉たまあらし

去こばしとまりておほ遊あそべ

あかは波なみお消きえ失うせぬ
さだをさき世よのさまに似にて

おぼろ月夜つきよにちる花はなの

すがたを見みせてふる霰あられ
ひろひあつをて贈おくりらんと

うくる袂たもとに消きえ失うせぬ
戀こひしき人のかけに似にて

空そらまたかむ地ちにさけび

あられ

勝つも負くるも隔なく
まほびくだけてふる霞

同じ枕よきえ失せぬ
わかき心の慾お似て

松の末葉をいのちふて

あづかふのこる玉霞

くだりしをりの時れ聲
いづこれ胸お眠るらん
あらいあそびの夢よ似て

かたみれ琴

わが母のいづくふゆき
手おふれし琴をみすて

わが母のいづくふゆきし
弾きなれし琴をのこして

塵はらふ人もなけれは
こゑたえて日の重なりぬ

片言よくりかへしたる

ほゝゑみし母のおえかげ
汝が面おいまもうつれり

あつかしき指ふひかれて
うごきしあはれこの糸

壁に立ちのこれる琴よ
汝も忘れず

朝夕ふむかむし影を
愛れひかりを

花も散れ鳥もよし行け
わが母れ歌聲かへせ

月白し空おもい移し
わが目よ霧こそかゝる

春も来ぬ山もどらひぬ
わが胸そこをりぞとけぬ

わが母あきやどを
いかにせん聲せぬ琴を

千鳥

夕風ふ吹きわけらきて
波間の千鳥

子の親のあと追ひかねて
遠近よよびかはすらん

我もまた父まぢかねて

千鳥

磯ちかく立つぞ久しき
やよ千鳥あはれ口同じ

朝月夜すがたうつして
つばさもて父を迎へよ

夕日影くもよさえても
鯛つりおいでたる父の

折れ返り岩うつかみぬ
かへり来す舟だふ見えす

いづかたふゆま浮ぶらん
はらわたよ響きて寒し

やよ千鳥わが待つ心
ゆきてつたへと

あへ産息影

木の間より暮る夕日を

みどり伏す草葉を撲ちて
織り掛くる水の文

おもしほの小川の姿
まかれば逢ふ波の雪

その色はわが胸の
忘れんやすれども去らず

その声はわが耳に

薄霧うすぎりはなかなかに沈しづみて

くまのこる寺てらの塔た

こゝかしこ色いろづく木き々の

あが心こころいまも返かへすゆげしき

見みし夢ゆめのれおるおり

入いり相あひまの鐘かねをしるべし

聞きく聲こゑのそわうつゝ

謡うたひつゝ野の路ぢのかみより

過くわ去こもなく未み来らいも知らぬ

子こよ

追おし風かぜのおほふどあはれ

汝ちが時のうつくしき

女を郎ら花はなふぢむかま

おもかげのよそおれど

少女の死

一ひと嵐あらしこそすゑにすぎ

初はつ花はなのゆもとめす

宵よひの雨あめくもをりたちて

見みえそをらし月つきもかくれぬ

少女の死

あを君の月か花か

春ふかきぞかりのこして

のぞみのこして

霞たつうみのあふふ

君すむとたのみをかけて

雲のみち雁のゆくへも

眺免しものを

玉章もゆかぬ里

うつりぬといふの真か

さくらの真か

父母のなどてか君を

ひとりゆく旅路もかなし

ひとりのこさるゝ此世もさびし

そらよ飛ぶ星とみえて

消江しづむはかおの君や

あはれその影

冬の月

我はむかしの春の月

我はきのふの秋の月

つねに變らぬ影ぬきど
世界はいつか老いふけり
夜あくた、く窓の戸を
あけて迎ふる人もあし

白妙ひびき園のうち
いづれは影を休らへん

そよ吹く風ふさはれて
花はあそびしおぼろ夜は

あふる、戀をうつたふる
少女は歌もさ、つるよ

ゆふべに窓に讀みのこす

時々あぐるゑみの肩も我に見し

寵おとろふる庭の菊影は我は見し

馴きて訪むよる高殿の音も絶えて

ひとり時をくともし火の光ほそりゆく

はしる霞のうしほより

廊下を危ぐるさびしそよ

瑳の木の間あらはれて

いまの靨をかくしつゝ

氷底はねむきども

歌紙をさむる汝が胸を

麓ふいそぐかりびとを

反響ふ吹ゆるね布りみい

我なぐさむる音楽か

落葉ようづむかけ橋を

嵐とふたりうちわたる

天ざる雪とたゝかひし

うらみも敵も知らぬ身は

くまおさき海よわが舞臺

いかきる海よまが旅路

冬の月

五十一

神代かみよのまゝの影かげ照あれど

我われの来こん世よの春はるれ月つき

世せ界かいのまたも若わかやがん

かまみの衣きぬ

ふつゝまれて

高たか嶺おのどかふ立たたん時とき

春の歌

舞まふつるのつばさふ隠かくれ顯あらはきて

一ひと峯みねしろきはるのとほ山やま

また

おがれよる芦あしの古ふる根ねをますがよて

一ひとむらあをむはるのわか草くさ

庭には鳥どりのまたいづが軒のき端はよとさつくる

あゑあたゝかき霞かきむそらかる

山やままどの楓かへのまた日ひか葉はあをみ江えて

春はるぞびしくもあまきるころかあ

春の歌

五十三

五十二

夏の歌

瀬をはやみ月もくだくる谷川よ
一聲まどるやまほと、ぎす

また

夕立の何らむすてたる青ぞらよ
涼しくのこる富士れたかやま

秋の歌

秋風ふ吹きよせらきてはふれ洲の
芦間をひとつゆくほたるかち

また

うきれゆく波の日影をかたよせて
一をぢ己たるあきのゆふ風

また

秋風ふまかせはてゝるわがふはひ
おぼる、種の數もさだ免す

また

あすさかん菊のつぼみもかすそひて
雨たのもしきゆふぐれは庭

秋の歌

また
散りきてまた流れゆくもみぢ葉よ
みぎはの夕日うかぶまもあし

冬の歌

朝月夜しかのふいどもあらそれて
かれの、尾花霜よふすあり

また

いそでらのせもし火そむくふくる夜ふ
岩こす波のこゑばかりして

雑の歌

軒ちかく流る、星のかげ何をし
ねぎめやひかふ遠方れそら

また

舟人の友よぶあゑも何はれあり
とちと入江のあめのゆふぐま

また

海さしづむ歌もひとせき石橋の
山松が枝ふあき風ぞふく

雑の歌

風^{かぜ}ひとりいくさの聲^{こゑ}をしらぶかり
また
月^{つき}をあるじの志^{こころ}の^{たか}高^{たか}殿^{どの}

小兒の病み居けるころ

わがひざふ頭^{かしら}もたせてうちねむる
ちどのおもわのかくも瘦^やせつる
さとして^{さとし}もまだき、しらぬ^を幼^{わらわ}兒^ちふ
くすりのまをるおやのくるしさ

旅日記の中より

江^えの島^{しま}のともし火^びあをく暮^くれはて、
片瀬^{かたせ}よかつる夜^よあらしの聲^{こゑ}

折^をきかへる波^{なみ}をかすめて飛^とぶ鳥^{とり}の
また
つばきよきはる島^{しま}かげもあし

あすおえん箱^{はこ}根^ねの山^{やま}の杉^{すぎ}のうへふ
また
かすみてかゝる春^{はる}の夜^よのつき

また

旅日記の中より

谷川のおとよりわかふ友をかし

山またまれあけくれのそら

村雨の木々また

ゆふぐれまごさ木曾の山ご江

神をびて



明治二十一年十二月廿日印刷
全 年十二月廿一日出版
全 二十二年六月廿五日再版

版權所有
定價十五錢

東京牛込區市ヶ谷仲ノ町四十番地

著者 大和田 建樹



發行所 東京日本橋區通鹽町八番地
印刷者 宮川 保



發行所 中央 堂



高等師範學校教諭 大和田建樹先生
高等師範學校助教諭 奥好義先生

同選

● 明治唱歌 第一集

定價十二錢
郵税六錢

● 明治唱歌 第二集

定價十二錢
郵税六錢

● 明治唱歌 第三集

定價十二錢
郵税六錢

● 明治唱歌 第四集

明治廿二年
十一月發行

高等師範學校教諭 大和田建樹先生
高等師範學校助教諭 奥好義先生

同選

● 明治幼稚の曲 第一集

定價八錢
郵税四錢

● 明治幼稚の曲 第二集

二十二年七月
中旬發行

● 明治唱歌 和建樹先生著

定價十五錢
郵税六錢

● いさり火
これハ大和田先生が明治唱歌その外の雑誌等にもまだ載せられざる新趣向の近作を
あつめて一冊とせられたる長歌の歌集なり

● 進行曲

定價三錢
郵税二錢

右ハ諸學校に於て生徒の運動進行を爲す際「オルガン」「ピアノ」「バイオリン」等を以

奏するものあるが未だ此種類の書出版なきに因り不便少からざりしに今此適切ある

式部次官從四位勳三等男爵高崎正風先生作歌

式部職樂師兼東京音樂學校教員上眞行先生作曲

●忠愛將基之盤

洋琴伴奏附

本曲ハ小學兒童ニ忠君愛國ノ志ヲ養ハシムルノ一助トセンガ爲メ男爵高崎正風先生

ノ作ラレタル唱歌ニ上眞行君ノ曲譜ヲ附セラレタルモノニシテ昨年七月東京音樂學

校ノ演奏會ニ同校生徒諸氏ノ始テ合唱ヲ試ミラレタル一大新曲ナリ今般弊堂作者ノ

許可ヲ得テ出版仕候間小學校諸君ハ申スニ及バズ苟モ唱歌ニ志アルノ方々ハ速ニ一

部ヲ購求シテ壯快ナル歌詞ト活潑ナル曲節トヲ味ヒ玉ヘ

米國ルミリス君原著 日本 東儀季治君譯述

日本 上眞行先生校閱

●小學唱歌教授法

近來音樂書ノ著譯日ヲ逐フテ多キヲ加フルレハ實ニ歌唱ノ方法ヲ説ク者ニ至リテハ音

樂指南(官版)ノ外ニ未ダ一書ヲ見ザルハ實ニ歌唱ノ方法ヲ説ク者ニ至リテハ音

君本書ヲ譯述サレテ弊店之レヲ出版シタルハ其良書タルハ敢テ多ク辨テ要セズ加フルニ例

ハ上先生ノ校閱ヲ經テ完成セシ者ナレハ先生ノ其定價ヲ附シテハ敢テ極メテ廉ナリコレ

証ノ歌曲數十種ニハ有名ナル大和田先生ノ其定價ヲ附シテハ敢テ極メテ廉ナリコレ

出版者ノ精神專ラ風教ニ裨補セントスルニアリテ決シテ利的ニアラザルノコトヲ證明ト

ス世ノ音樂教育熱心ノ諸君ハ疾ク一本ヲ購求シテ鴻益ヲ収メ玉ヘ

定價三十錢 郵稅十六錢

中央堂主人敬白